

排水対策と土づくりは、大豆の初期生育を促進させ、収量・品質の向上につながる重要な作業です。播種前に必ず行いましょう。

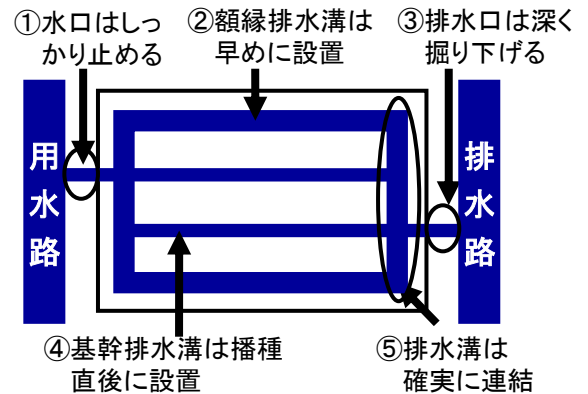
また、昨年は莢先熟株の発生が目立ったことから、極端に早い播種を避けるなど計画的に作業を進めましょう。

栽培のポイント

- 額縁排水溝の設置などによる排水対策の徹底
- 石灰質資材と有機物の施用による土づくり
- 播種時期や播種量等の調整による丁寧な播種作業の実施

1. 排水溝の設置

- ・水口はしっかりと止め、水が入らないようにしましょう。
- ・耕起前に深さ20cm以上の額縁排水溝を必ず設置しましょう。
- ・播種直後に基幹排水溝を設置し、排水溝や深く掘り下げた排水口と必ず連結しましょう。
- ・播種後も排水溝の点検・手直しをするなど、ほ場に水がたまらないようにしましょう。



2. 土づくりの実施

①有機物の施用

- ・大豆の作付回数増加に伴い、地力が低下しています。収量・品質の向上を図るため、堆肥や発酵鶏ふん等の有機物を積極的に施用しましょう。

②石灰質資材の施用

- ・近年、土壌pHが低下しています。大豆の生育に適した土壌pH6.0～6.5を目標に石灰質資材を施用し、生育量を確保しましょう。

【堆肥施用の目安】

資材名	散布量(10a当たり)
牛ふん堆肥	1～2t
発酵鶏ふん	75～150kg

【石灰質資材施用の目安】

資材名	散布量(10a当たり)
苦土石灰	100kg

※「産地交付金(大豆)」に土改材加算(石灰質資材の施用に対する加算金)が設定されます。

3. 種子の準備

- ・種子は、「毎年」更新しましょう。
- ・紫斑粒やフタスジヒメハムシ等の病害虫発生防止のため、種子消毒は必ず行いましょう。

薬剤名	使用液量	対象病害虫
クルーザーMAXX	乾燥種子10kg 当たり80ml	アブラムシ類、タネバエ、ネキリムシ類、フタスジヒメハムシ 紫斑病、茎疫病、黒根腐病、リゾクトニア根腐病、苗立枯病(ピシウム菌)

4. 播種作業

- ・耕起、碎土・整地、播種、作溝の一連の作業は、好天日には場が乾いている状態で行い、1日で終えましょう。
- ・播種作業はゆっくり丁寧に行い、碎土率（60%以上）と播種精度を高めましょう。
- ・作業速度が速くなると欠株が多くなるので、0.5m/秒程度の速度（3連の播種機で、30aのほ場を70分程度）で播種しましょう。
- ・畦立同時播種や排水溝の設置により湿害を防ぎ、出芽・苗立の安定化に努めましょう。
- ・播種深度は3cmを目安に播種機を調整し、種子が露出しないようにしましょう。
- ・昨年度、莢先熟が多発した地域では、極端に早い播種は避けましょう。

「えんれいのそら」は、従来の「エンレイ」より収穫時期が5日程度遅くなるので、収穫時期に注意して計画的に播種しましょう。



【播種量の目安】

品種名	播種時期	栽植本数(本/10a)	播種量(kg/10a)
えんれいのそら	5月6半旬～6月上旬	14,000～16,000	5.4～6.2
	6月中旬	16,000～18,000	6.2～7.0
シュウレイ	5月6半旬～6月上旬	12,000～15,000	4.6～5.7
	6月中旬	15,000～18,000	5.7～6.9
オオツル	6月上旬	10,000～12,000	4.1～4.9
	6月中旬	12,000～14,000	4.9～5.7

品種、播種時期に応じた種子を準備し、目標の栽植本数を確保しましょう！

※百粒重（大粒）：えんれいのそら：34.9g、シュウレイ：34.4g、オオツル：36.7g

※シュウレイやオオツルは、栽植本数が多くなりすぎると曇化（つるぼけ）や百粒重が低下しやすいので注意しましょう。

5. 基肥量の目安

- ・基肥は、土壌条件等に基づいて、適正な量を施用しましょう。

肥料名	10a当たり施用量(kg)	
	単作	麦跡
化成肥料オール14	20～25	35～45
BB基肥084	28～35	50～60

砂壤土地帯を中心にカリ成分が不足しています。そのようなところでは、「BB基肥084」を積極的に施用しましょう。

6. 除草剤の散布

- ・播種後、速やかに除草剤を散布し、雑草の発生を抑えましょう。

除草剤名	散布量	注意点
エコトップP乳剤	500ml/10a (希釈水量:100ℓ)	<ul style="list-style-type: none"> ・除草効果を高めるために、土壌の碎土率を高めましょう。 ・散布直後の多雨は葉害を生じる恐れがあるため、天候を見極めて散布しましょう。
エコトップP細粒剤F	4～6kg/10a	